

II 病害虫発生予察事業

1 病害虫の発生経過概要および発生原因解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	苗立枯病	並	並	早期水稲、普通期水稲とも発生程度は平年並であった。		
	いもち病 葉いもち	早期： やや遅 普通期： やや遅	早期： やや少 普通期： やや多	早期では、8月5半句より発生が見られ、7月下旬の発生圃場率は24%、発病株率は1%であった。 普通期では7月2半句より発生がみられたが、7月下旬に病性品種を中心に急激な病勢の進展がみられ、8月上旬の発生圃場率は54%、発病株率は14%と高かった。また、ずりこみや上位葉への進展もみられた。	・7月中旬の低温、曇雨天	・育苗箱施薬及び本田期における薬剤散布
	いもち病 穂いもち	早期：遅 普通期：並	早期：少 普通期：並	早期では、発生時期が遅く8月6半句にみられたが、発生は少なかった。 普通期では、8月6半句より発生がみられ、9月上旬の発生圃場率は7%、発病率は0.5%であった。	・穂ばらみ期～出穂期の降雨少	・出穂前の粒剤施薬 ・出穂時に殺虫殺菌混合剤によりカメムシ類等との同時防除
	紋枯病	早期：並 普通期：並	やや多	早期では、8月4半句より発生がみられ、8月上旬の発生圃場率は76%、発病株率は7%で出穂後の上位葉鞘への進展もみられた。 普通期では、7月5半句より発生がみられ、その後各地で葉腐れ症状の圃場が認められた。9月上旬の発生圃場率は52%、発病株率は7%とやや高く、上位葉鞘への進展もみられた。	・莖数がやや多かった ・9月の高温	・穂ばらみ期～出穂期にコブノメイガ、ウンカ類との同時防除
	ばか苗病	並	並	早期、普通期とも平年並の発生であった。		・ベノミル耐性菌に有効な種子消毒剤の使用
	白葉枯病	並	やや少	早期では発生を認めなかった。 普通期では9月2半句に発生を確認したが、全般的にはやや少の発生であった。		・常発地帯の一部で防除が実施された。
	もみ枯細菌病	並	やや少	早期では発生を認めなかった。 普通期では早生種で9月1半句より発生がみられたが、その後の降雨も少なく、全般的にはやや少の発生であった。	・出穂時期の降雨少	・穂いもちとの同時防除
	ツツクハコバエ 萎縮病	並 並	やや多 並	越冬密度は平年並であった。第1世代成虫最盛期は8月4半句、第2世代成虫最盛期は7月5半句であった。発生時期は平年並であったが、発生量はやや多かった。第1世代の保毒虫率は0.1%であった。 萎縮病は、局所的な発生もみられたが、全般的には平年並であった。	・保毒虫率が低かった。	・箱施薬によりいもち病、ウンカ類等との同時防除 ・本田ではウンカ類との同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	ヒメトビウカ	やや早	並	ヒメトビウカの越冬密度は平年並であったが、第1世代幼虫の小交圃場における生息量は前年よりやや多かった。第2世代以降の発生量は平年並であった。越冬世代成虫最盛期は3月5半旬、第1世代成虫最盛期は6月1～2半旬、第2世代成虫最盛期は7月1～2半旬で、発生時期はやや早かった。第1世代の保毒虫率は8.5%であった。		・箱施薬によりもち病、ウンカ類等との同時防除 ・一部で本田並びに畦畔防除が実施されたが、主としてウンカ類との同時防除が行われた
	綿葉枯病	早期：並 普通期：並	並	綿葉枯病は、早期では6月下旬より発生がみられ、その後各地で発生を認めたが発病株率は低く、平年並の発生であった。普通期では、7月上旬より発生したが、全般的には平年並の発生であった。		
	セジウカ	並	やや少	5月8日に初飛来。7月14～15日、18日を中心に飛来がみられたが、全体の飛来量はやや少なかった。	・飛来量がやや少なかった	・幼虫ふ化摘い期の防除
	トビウカ	並	やや少	セジロウカとほぼ同時期の飛来であったが、飛来量はやや少なかった。株当たり寄生虫数は、8月下旬0.01頭、9月上旬0.5頭であった。9月下旬には普通期水稲で坪枯が初確認された。なお、8月の短翅雌率は61%とやや高かった。	・飛来量がやや少なかった	・コブノメイガ等との同時防除 ・幼虫ふ化摘い期の単独防除
	アノメイガ	並	並	主な飛来は、7月14～15日、18日にみられた。飛来量は平年並であった。被害株率は、早期では7月下旬21%、普通期では9月上旬31%であった。また、普通期では防除不徹底により止葉の被害が目立つ圃場が一部でみられた。		・第1世代の防除はウンカ類との同時防除 ・第2世代の防除は紋枯病との同時防除
	イネミズゾウムシ	並	並	越冬密度はやや多かった。4月上旬には畦畔雑草で摂食活動がみられ、早期水稲では田植直後から圃場侵入がみられた。5月下旬の被害葉発生圃場率は84%、株当たり寄生虫数は0.02頭であった。普通期早植地帯では山間地などで被害が目立ったが、発生量は平年並であった。		・箱施薬による防除が主体
	斑点米カミシ類	並	やや多	雑草地での発生量が多かった。早期、普通期とも平年より発生がやや多く、早期では、8月上旬の発生圃場率が11%、20回すくい取りの平均値が0.2頭であった。普通期では9月上旬の発生圃場率が5%、20回すくい取りの平均値が0.1頭であった。		・出穂期～乳熟期に穂いもちとの同時防除
スミツギガイ	並	並	昨年秋期の発生が多く、越冬生貝も多かった。また、既発生地域において面積の増加がみられた。3月下旬以降水路での活動が認められたが、被害は、田植後の大雨による冠水もなくやや少なかった。	・大雨による冠水がなかった	・貝、卵塊の捕殺 ・IBP粒剤の施用	

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ムギ類	さび病類	やや早	少	小麦の赤さび病は、4月上旬から発生が見られたが、4月下旬の発生ほ場率は4.5%、発病基率は0.01%であった。 その他のさび病類は発生を認めなかった。		・一部地域を除いて防除がほとんどされていない。
	うどんこ病	並	並	3月下旬から小麦と二条大麦に発生、4月下旬以降二条大麦で一部に多発圃場がみられたが、全般的に平年並の発生であった。		
	赤かび病	並	少	4月下旬に裸麦に発生、5月以降小麦で発生が見られたが、全般的に少発生であった。		
	縞萎縮病	並	並	3月下旬、大麦の発生圃場率は43%で、一部に多発ほ場がみられた。 小麦では発生を認めていない。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ジャガイモ	葉巻病	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：一部に多発圃場がみられたが5月下旬の発病株率は0.9%であった。 秋作：11月下旬の発病株率は0.02%と平年並であった。		・種いも更新 ・アブラムシの防除
	モザイク病	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：平年並の発生であった。 秋作：10月下旬の発病株率は0.03%であった。		・種いも更新 ・アブラムシの防除
	疫病	春作： やや早 秋作： やや早	春作： やや少 秋作： やや少	春作：3月から発生し、5月下旬の発生圃場率8%、発病株率0.4%であった。 秋作：10月上旬より発生し、10月上旬の発生圃場率は8%、発病株率0.9%であったが、その後の好天により進展は見られず、11月下旬の発生圃場率は4%、発病株率は0.04%とやや少の発生であった。	・5月上中旬の好天	・発生前または発生初期からの薬剤散布
	アブラムシ類	春作：並 秋作：並	春作： やや多 秋作：並	春作：5月以降増加し一部に多発圃場も見られ、5月下旬の発生圃場率88%、寄生株率54%であった。 秋作：11月上旬の発生圃場率70%、寄生株率45%であった。	・5月上中旬の好天	・アブラムシの種類を考慮した使用薬剤の選択
	ニョウバネアザチ	春作：並 秋作：並	春作： やや少 秋作：並	春作：やや少の発生であった。 秋作：9月下旬の寄生株率は0.2%であった。		・アブラムシ類との同時防除
	ジャガイモガ	春作：並 秋作：並	春作：並 秋作：並	春作：生育後期に増加し5月下旬の発生圃場率は7.7%、被害株率は0.4%であった。 秋作：11月下旬の発生圃場率は29%、被害株率は2.1%であった。		・アブラムシ類との同時防除
	食葉性ヤガ類	春作：並 秋作：並	春作： やや少 秋作：並	春作：全般にやや少の発生であった。 秋作：11月上旬のヨトウムシ類の被害株率8%であった。		・アブラムシ類との同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
サツマイモ	イモキバガ	並	並	各地で発生したが、平年並であった。		
	ナカジロシタバ	並	並	各地で発生したが、平年並であった。		
	ハスモンヨトウ	並	並	各地で発生したが、平年並であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
大豆	紫斑病	並	少	紫斑粒率は低く、0.2%であった。		
	べと病	並	並	9月上旬より発生がみられ、一部に多発ほ場が見られたが全般的に平年並の発生であった。		
	葉焼病	並	並	8月下旬より発生がみられ、その後各地で発生した。9月下旬の発生ほ場率は47%、発病株率は18%であった。	・8月中旬の断続降雨	
	ハスモン	やや早	並	7月下旬より白変葉がみられ、その後各地で発生した。白変葉の発生ほ場率は9月上旬で61%、9月下旬で77%と高くなったが、株当たり寄生虫数は9月下旬で0.2頭と少なかった。	・成虫飛来量は平年比やや多であったが、9月以降平年並となった。	・8月下旬の若齢期を主体に防除が実施された。
	鱗翅目幼虫類	並	やや少	8月下旬よりウワバ類の発生がみられ、その後各地で発生した。10月上旬の発生ほ場率24%、寄生株率は8%であった。		
	かみり類	やや早	並	8月上旬以降各地で発生が見られたが、9月下旬の寄生株率は1.4%、株当たり寄生虫数は0.1頭以下であった。		・ハスモンヨトウとの同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
カンキツ	そうか病	並	並	春葉での初発は、4月19日に大村市で認められた。4月下旬の春葉への感染はやや多かったが、その後5月中旬以降の少雨により発生は平年並となった。果実での発生は8月になり増加し、7月上旬は発生圃場率29%、発病果率4.8%と高かった。9月下旬の発病果率は0.2%であった。		
	かいよう病	早	多	越冬病斑量は一部で多い圃場が認められ、平年よりやや多かった。春葉での発生は5月中旬より認められたが、6月になり発生が急激に増加し、一部に激発圃場もみられ7月上旬の発生圃場率56%、発病葉率3%と高かった。果実での発生は6月下旬より認められ、その後も増加し、9月上旬の発病果率は1.7%であった。	・昨年の台風による夏秋梢への潜伏感染が多く、伝染菌量が多かった。	
	黒点病	並	並	春期の枯れ枝の発生量は平年より多かった。 果実への感染は8月中旬より認められたが、9月下旬の発生圃場率は77%、発病果率は23%であった。一部に多発圃場がみられた。		
	ヤブキイガラムシ	並	並	1齢幼虫の初発時期は、第1世代が5月上旬で平年並、第2世代は7月下旬と平年に比べやや遅かった。 県下全域で本虫に対する寄生蜂の寄生が認められる。		
	ミカンハダニ	並	やや多	冬期マシンの油乳剤無散布園を中心に春先より発生が多く、5月中旬～6月中旬の少雨により、7月上旬には寄生率率が13%と高くなった。梅雨明け後、やや少ない密度で推移したが、9、10月の好天により密度が増加、果実への寄生が多かった。		・台風による樹勢低下のため、冬期マシンの油乳剤の散布が実施されなかった。
	カミシ類	やや早	並	越冬成虫量は平年に比べやや多かった。カンキツ園への飛来は5月中旬に多くみられ、いったん減少した後、ふたたび7月より増加した。8月中旬以降は園への飛来は少なかった。予察灯への飛来も、5月中旬及び7月に多かったが8月以降極端に少なかった	・暖冬により越冬量が多かった。 ・ヒノキきゅう果の着果量が少なく前期型の発生となった。	・MEP、DEP、合ピレ剤による防除。 ・薬剤の残効が短い。
	アブラムシ類	並	やや多	春先の発生は少なかったが、5月下旬には新梢への寄生が急激に増加した。ワタアブラムシが主体であったが、一部でミカンクロアブラムシの発生もみられた。		・各地で合成ピレスロイド剤の効力低下が見られた。
	チャキイロアミミ	並	並	越冬成虫及び第1世代成虫、第2世代成虫の発生量は平年並であった。被害果は7月上旬より認められ、7月下旬以降増加したが9月下旬の被害果発生圃場率は77%、被害果率は7%であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ビワ	がんしゅ病	並	並	春葉での初発は3月24日、夏葉での初発は6月23日とともに平年並であった。発生は春葉で平年並、夏葉でやや多かった。		・登録薬剤が少ない。
	灰斑病	並	並	春葉、夏葉とも平年並の発生であった。		
	褐斑病	並	並	一部夏葉で発生の多い圃場が認められたが、全般的には平年並の発生であった。		
	ナヒクソクイ	並	並	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年並であった。		
ナシ	黒斑病	並	並	初発は4月23日で平年並であった。6月に入り発生が増したが、6月下旬の発生圃場率46%、発病葉率2%であった。		・防除回数が多い
	黒星病	並	やや少	初発は5月13日で平年並であった。常発地では果実への発生もみられたが、全般に葉、果実とも平年に比べやや少なかった。		
	赤星病	並	並	初発は4月5日であった。		
	うどんこ病	並	並	8月下旬より発生を認め、9月には一部に多発圃場がみられたが、全般的には平年並の発生であった。		
	ナヒクソクイ	並	並	フェロモントラップによる誘殺量は、各世代とも平年並であった。		
	ハダニ類	並	並	7月下旬より発生が認められ、9月上旬には一部多発圃場も見られたが、全般的には平年並の発生であった。		
	カメムシ類	やや早	やや多	越冬成虫量は平年に比べやや多かった。幼果期に一部被害がみられたほか、7月にも早生種で落果の被害がみられた。8月以降は飛来は少なかったが、被害量は平年に比べやや多かった。		
	アブラムシ類	並	やや多	4月下旬より発生が増加し、6月上旬には発生圃場率100%、平均寄生新梢率は35%と高かった。ワタアブラムシが主であったが、ユキヤナギアブラムシの寄生もみられた。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ブドウ	黒とう病	並	並	初発は4月23日に大村市で認められた。その後5、6月の少雨により発生は少なく経過していたが、7月上旬には一部多発圃場もみられ、発生圃場率67%、発病新梢率5%と増加した。全般的には平年並の発生であった。	・5、6月の降雨	・防除回数増加
	べと病	並	少	8月に入り発生がわずかに認められた程度で、発生は少なかった。		
	灰色かび病	並	やや多	開花期の曇雨天によりやや多かった。		
	うどんこ病	並	やや少	7月に入り発生が認められたが、7月下旬の発生圃場率33%、発病葉率2%であった。		
	チャノキイロアザミウマ	並	並	第1世代、第2世代ともに成虫発生量は平年並であった。果実への被害は平年に比べやや少なかった。		
	ブドウウラカミキリ	並	並	常発圃場での発生が目立ち、8～9月に成虫の羽化がみられた。		
チャ	炭そ病	並	並	梅雨明け後、三番茶摘採中止園及び秋芽での発生が目立ったが、全般的には平年並の発生であった。	・二、三番茶期の曇雨天	
	もち病	並	やや少	7月及び9月には常発地で発生がみられた。		
	チャノカクモンハマキ	並	並	第1世代は平年並、第2世代は平年よりやや多い発生であった。第3世代の発生量は平年並であったが、一部秋芽の被害が目立つ圃場も認められた。		
	チャノネカ	並	少	各茶期を通して発生は少なかった。		
	チャノミドリヒメコバエ	並	並	春先から発生量が少なかったが、二番茶期以降は平年並の発生であった。		
	チャノキイロアザミウマ	並	並	秋芽で多発した圃場もみられたが、全般的に発生量、被害量とも平年並であった。		
	カンザクハダニ	並	並	二番茶期に多発被害を受けたが、全般的に平年並の発生であった。		
	クワシロカイガラムシ	並	やや多	第1、2世代の発生量は平年並であったが、第3世代以降の発生量は平年に比べやや少なかった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬春トマト (平成3年 植付)	モザイク病	やや早	並	3月上旬、一部の圃場で発生し、発病率は0.07%であった。		・土壌消毒 ・育苗期から定植期のアブラムシ防除
	疫病	並	やや少	5月下旬、一部圃場で発生が認められたが、全般にはやや少ない発生であった。		・初期防除の徹底
	葉かび病	並	やや多	生育初期より発生し、発病率は3月下旬が8.1%、4月下旬が10.3%であった。		・発病初期からの薬剤散布
	灰色かび病	並	並	3月上旬～4月下旬の発病率は0.2%台で推移した。		・薬剤耐性菌対策を念頭においた薬剤散布 ・被害果の除去
	アブラムシ類	並	並	3月下旬の寄生率は0.6%であった。		
	コナジラミ類	やや早	並	生育初期の10月からやや多い発生であったが、11月下旬以降減少し、3月にやや増加したものの全般的には平年並の発生であった。主体はタバココナジラミであった。		
冬春トマト (平成4年 植付)	モザイク病	並	並	3月上旬の発病率0.02%と平年並の発生であった。		
	疫病	並	やや少	1月下旬、一部の圃場で発生を認めたが、全般にはやや少の発生であった。		
	葉かび病	並	やや多	3月上旬まで発病率3%以下で推移したが、3月下旬以降増加し、3月下旬の発病率は10%とやや多の発生であった。	・3月中下旬の曇天	
	灰色かび病	並	並	1月下旬の発病率は0.1%、5月下旬は0.3%で平年並の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	全般に平年並の発生であった。		
	コナジラミ類	やや早	並	生育初期の11月上旬はやや多の発生であったが、11月下旬以降減少し、全般的には平年並の発生であった。主体はタバココナジラミであった。		
冬春きゅうり (平成3年 植付)	モザイク病	並	やや少	生育後期に一部の圃場で発生を認めたが、全般にやや少ない発生であった。		・アブラムシの防除
	斑点細菌病	並	やや少	11月に一部の圃場で発生したが、全般にやや少ない発生であった。		
	べと病	並	やや多	11月下旬の発病率は0.7%であった。1月以降発生が増加し、3月下旬に発病率11%とやや多の発生であった。	・1、3月の曇天	・発生初期からの薬剤散布

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬春きゅうり (平成3年 植付)	褐斑病	並	並	5月上旬の発生圃場率は8.3%であった。		
	うどんこ病	並	並	11月下旬の発病葉率は11%と増加し、5月下旬の発病葉率34%で平年並の発生であった。		
	灰色かび病	並	並	11月下旬の発病果率0.2%、3月下旬は1.3%であった。		・薬剤耐性菌対策
	菌核病	並	並	12月中旬から発生し、3月下旬の発病果率は3.4%であった。		・被害果の除去
	アブラムシ類	並	並	4月上旬の発生圃場率は8.3%、寄生葉率は0.08%であった。		
	ミミキアザミ	並	やや少	11月下旬から4月下旬まで寄生株率3%以下で推移した。5、6月にはやや増加したが平年に比べやや少の発生であった。		・定植時の粒剤施用 ・初期防除
	コナジラミ類	並	並	生育期間を通じて発生し、4月下旬の寄生葉率は6%に増加したが、全般的には平年並の発生であった。		
冬春きゅうり (平成4年 植付)	モザイク病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	斑点細菌病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	べと病	並	やや多	12月中旬の発病葉率5.8%、3月下旬は6.8%でやや多の発生であった。	・12月、3月中下旬の曇天	
	うどんこ病	並	並	12月中旬の発病葉率は5.4%、4月上旬は10%で平年並の発生であった。		
	灰色かび病	並	並	12月中旬の発病果率は0.3%、2月下旬は2.8%と増加したが、全般に平年並の発生であった。		
	菌核病	並	並	12月中旬の発病果率は1%と増加したが、3月上旬は0.1%と平年並の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	1月下旬まで寄生葉率0.04%以下で推移した。2月下旬よりやや増加したが、全般的には平年並の発生であった。		
	ミミキアザミ	並	やや少	3月下旬の発生圃場率29%、寄生葉率11%であったが、その後減少し、全般的にはやや少の発生であった。		
	コナジラミ類	並	並	11月下旬の寄生葉率12%とやや多の発生であったが、12月以降は減少し、全般には平年並の発生であった。主体はタバココナジラミであった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
メロン (春夏作)	モザイク病	並	並	5月下旬、一部の圃場で発生が見られたが、全般的には平年並の発生であった。		・寒冷紗によるアブラムシの飛来防止と薬剤散布
	えそ斑点病	並	並	4月下旬、一部の圃場で発生した。		・土壌消毒
	斑点細菌病	並	やや少	3月下旬の発生圃場率は7%、発病葉率は0.1%であったがその後の発生は少なかった。		
	べと病	並	並	5月上旬の発生圃場率20%、発病葉率0.1%であった。		・初期防除の徹底
	うどんこ病	並	やや多	5月下旬の発生圃場率55%、発病葉率17%であった。	5月の晴天乾燥	・薬剤耐性菌の発生回避を念頭においた薬剤散布
	つる枯病	並	並	5月下旬の発生圃場率18%、発病株率1%であった。		
	アブラムシ類	並	並	4月上旬より増加し、5月下旬の寄生株率は14%となった。		
	ミミズイロアザミ	並	並	寄生葉率0.4%以下で推移し、平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
すいか	つる枯病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		・初期防除の徹底
	炭そ病	並	やや少	6月下旬の発病葉率は0.1%であった。		
	ハダニ類	並	やや少	生育初期から中期にかけて寄生葉率は0.5%以下で推移し、全般的にはやや少の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	4月下旬から目立ち初め、6月上旬の寄生葉率は11%と平年並であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
春はくさい (平成3～ 4年植付)	根こぶ病	並	並	平年並の発生であった。		・定植時の土壌施薬
	コナガ	並	並	全般に平年並の発生であった。		・薬剤抵抗性対策のための 薬剤の輪番散布
秋冬はくさい (平成3年 播種)	モザイク病	並	並	11月下旬の発生圃場率は17%、発病株率は1.0%であった。		・生育初期のアブラムシ防除
	軟腐病	並	並	10月上旬に発生を認め、1月下旬には発病株率1%で全般には平年並の発生であった。		
	べと病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	白斑病	やや遅	やや少	12月下旬発生を認め、1月下旬の発病株率は3%であった。		
	黒斑病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	寄生株率は11月下旬23%、12月下旬28%と平年並で推移した。		
	コナガ	並	並	11月上旬から増加し、11月下旬の寄生株率41%、株当たり虫数10頭であった。		・薬剤抵抗性対策のための 薬剤の輪番散布
	ヨトウムシ類	並	並	11月下旬の寄生株率は1%であった。		
秋冬はくさい (平成4年 播種)	モザイク病	並	並	11月下旬の発生圃場率は18%、発病株率は0.1%であった。		・生育初期のアブラムシ防除
	軟腐病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	べと病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	白斑病	並	やや少	11月下旬に発生を認めたが、全般にやや少の発生であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
秋冬はくさい (平成4年 播種)	黒斑病	並	やや少	全般にやや少の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	寄生株率は11月上旬21%、1月下旬25%と平年並で推移した。		
	コナガ	並	並	9月から12月の寄生株率は1.2~14.2%で推移し、平年並の発生であった。		・薬剤抵抗性対策のための 薬剤の輪番散布
	ヨトウムシ類	並	並	10月上旬の寄生株率は0.7%であった。		
冬キャベツ (平成3年 植付)	黒腐病	並	並	11月上旬の発病株率は11%と増加したが、全般的には平年並であった。		・初期防除の徹底
	菌核病	並	並	12月下旬~3月上旬までの発病株率は0.1~0.4%で推移した。		
	アブラムシ類	並	並	12月下旬の寄生株率は12%、株当たり虫数は4.5頭であった。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	並	11月上旬の寄生株率は35%、株当たり虫数は1.9頭であった。		・薬剤のローテーション散布
	モンシロチョウ	並	並	10月から12月にかけて発生し、平年並の発生であった。		・コナガとの同時防除
冬キャベツ (平成4年 植付)	黒腐病	並	並	11月上旬の発生圃場率は8%、発病株率は0.1%であった。		
	菌核病	並	並	1月下旬に発生が増加したが、その後、発病株率は0.3%以下で推移し、全般に平年並の発生であった。		
	アブラムシ類	並	並	10月下旬の寄生株率は27%、全般には平年並の発生であった。		・コナガとの同時防除
	コナガ	並	並	10月下旬の寄生株率は42%、株当たり虫数は1.1頭と平年並の発生であった。		・薬剤抵抗性対策のための 薬剤の輪番散布
	モンシロチョウ	並	やや多	10月下旬の発生圃場率42%、寄生株率12%とやや多の発生であった。		・コナガとの同時防除

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
たまねぎ (平成3年 植付)	白色疫病	並	並	1月下旬から目立ちはじめ一部多発圃場も見られたが、2月下旬の発生圃場率は54%、発病株率は4.2%と平年並の発生であった。		・初期防除の徹底
	べと病	並	並	2月から発生がみられ、4月上旬の発生圃場率は32%、発病株率は6.1%であった。		
	ネトリフス菌葉枯症	並	やや少	1月下旬から発生がみられたが、4月上旬の発病株率1%とやや少の発生であった。		
	ネギアザミウマ	並	並	全般には平年並の発生であった。		
たまねぎ (平成4年 植付)	白色疫病	並	並	2月下旬より一部多発圃場も見られたが、全般に発病株率2%以下で推移し、平年並の発生であった。		
	べと病	並	並	3月より発生がみられ、全般に発病株率1%以下で推移し、平年並の発生であった。		
	ネトリフス菌葉枯症	並	やや少	1月より発生がみられたが、4月下旬の発病株率2%とやや少の発生であった。		
	ネギアザミウマ	並	やや多	4月下旬の寄生株率は62%とやや多の発生であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
冬にんじん (平成3年 播種)	黒葉枯病	並	並	11月上旬の発生圃場率は53%、発病株率は4.8%であった。		
	うどんこ病	やや遅	やや少	一般的にやや少の発生であった。		
冬にんじん (平成4年 播種)	黒葉枯病	並	並	11月上旬の発生圃場率は23%、発病株率0.9%と平年並の発生であった。		
	うどんこ病	並	やや多	11月より各地で発生し、多発圃場がみられ、11月下旬の発生圃場率は87%、発病株率47%とやや多の発生であった。	10~11月の乾燥	・発生初期からの薬剤散布
冬レタス (平成3年 植付)	灰色かび病	並	並	2月下旬に一部多発圃場が見られたが、全般に平年並の発生であった。		
	菌核病	並	並	3月下旬の発生圃場率は50%、発病株率は1.5%であった。		
	斑点細菌病	並	並	2月下旬の発生圃場率は5%、発病株率は0.1%であった。		
冬レタス (平成4年 植付)	灰色かび病	並	並	12月中旬の発病株率0.1%と平年並の発生であった。		
	菌核病	並	並	2月下旬の発病株率は0.3%と平年並の発生であった。		
	斑点細菌病	並	並	全般に平年並の発生であった。		
いちご (平成3年 植付)	炭そ病	並	並	10月上旬の発生圃場率は14%、発病株率は0.3%であった。なお、一部の地域で、育苗時期に異種菌による、萎枯症状の顕著な炭そ病(葉枯炭そ病)が発生した。		・育苗期の薬剤散布
	萎黄病	並	並	一部の圃場で発生し、3月上旬の発生圃場率は5%、発病株率は0.2%であった。		・薬剤ならびに太陽熱による土壌消毒
	うどんこ病	並	並	発病率は2月下旬が0.1%、3月下旬が0.2%であった。		・主としてEBI剤による防除
	灰色かび病	並	並	1月下旬から増加したが、3月上旬の発病率は1.2%であった。		・薬剤耐性菌対策として薬剤の輪番散布
	アブラムシ類	並	並	一部に多発圃場も認められ、12月下旬の寄生株率は3.6%であった。		

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
いちご (平成3年 植付)	ハダニ類	並	並	2月下旬の寄生株率は5.2%であった。		
	ハスモンヨトウ	並	並	定植直後から発生し、11月までの被害株率は3~10%で推移し、平年並の発生であった。		
いちご (平成4年 植付)	炭そ病	並	並	10月下旬の発生圃場率は11%、発病株率は0.2%であった。育苗期の葉枯炭そ病は、前年発生した地域で前年並に発生した。		
	萎黄病	並	並	3月に一部圃場で発生を認めたが、全般に平年並の発生であった。		・薬剤ならびに太陽熱による土壌消毒
	うどんこ病	やや早	多	育苗期から多発し、植え付け後も9月下旬から発生し、11月下旬の発病果率は0.9%、3月下旬は2.3%と多の発生であった。	・育苗期の多発 ・株冷、夜冷栽培の増加 ・本圃への罹病苗の持込み	・薬剤耐性菌対策を念頭においた薬剤散布
	灰色かび病	並	並	12月より発生したが、発病果率は1%以下で推移し、平年並の発生であった。		・定植初期の防除
	アブラムシ類	並	並	11月下旬の発生圃場率は19%、寄生株率は8.6%と平年並の発生であった。		
	ハダニ類	並	やや多	10月下旬の寄生株率14%と増加し、その後も全般にやや多の発生であった。	・10~11月の乾燥	・育苗期からの薬剤散布
	ハスモンヨトウ	並	並	定植直後から発生し、12月までの被害株率は4~7%で推移し、平年並の発生であった。		
しょうが	モザイク病	並	並	一部の圃場で発生が見られたが、一般的に平年並の発生であった。		
	根茎腐敗病	並	並	9月下旬の発病株率は0.3%であった。		・定植前の土壌消毒 ・発病後の粒剤施用
	白星病	並	やや少	一般的にやや少であった。		
	メイガ類	並	並	9月下旬の被害株率は2.8%であった。		